

会員の広場



ナベさんの「人生にこここ講話」

願わくば花のしたにて春死なむ ーさまざまな死生観

全日本大学開放推進機構副理事長 渡辺 一雄

久しぶりに以前働いていた会社のOBの会に出席した。60歳すぎてから会社のOBの会とか、学校の同窓会にはなるべくいかず、新しい地域の集いに積極的に参加するようになってきた。それはそれなりに理由があるのだが、今回はたまにはなつかしい元の職場の人々に会うのもいいかと出かけてみた。会場につくと受付の人が私に会の冒頭に挨拶をして欲しいという。「何故私が？」と聞くと、私が一番高齢者だからだという。

一瞬めまいがしそうであった。いつの間にそんなに年をとったのだろう。そろそろ「死に支度」をする年になったなという思いがよぎった。落ち着いて名簿をゆっくり眺めると、私より長寿の先輩の名を見つけ(当日欠席)、ちょっとほっとし、私より若い人の死亡を知ると、バクダンが至近距離に落ちたような気分になった。

丁度、その頃、「おくりびと」(アカデミー賞外国語映画賞受賞)を見たあとだけに、なおさら死に支度とか死生観について考えさせられたのかもしれない。日本人は死を感覚的に最も忌み嫌い、高齢になっても死に関する話は避けようとする傾向がある。時には、高齢者達がPPK(ピンピンコロリ)で死にたいなあなどと云って大笑いしているが、自分はまだまだだと思っているし、第一そんなにカッコよく死ねるものではない。

カッコよく死んだ人といえば、西行法師を思い出す。

「願わくば花のしたにて春死なむ その如月の望月のころ」

西行は自分の愛した桜の花の下で、釈尊と同じ日に死にたいと生前にこの辞世の歌を公表し、予告通りにその日に他界したので、当時の歌人たちは度肝を抜かれたと伝えられている(享年73才)。「偶然だよ」とせせら笑う人もいるが、今ではさすがに西行法師だということになっている。

1912年生まれの新藤兼人監督の死生観を紹介してみよう。彼は親しい友人で73才で亡くなった宇野重吉の死への問い方を例に引きながら、彼の死生観を記したものがある。

今から20数年前に2度のガンの手術をした宇野重吉は、死期を悟ってから宇野重吉一座を組んで旅に出たという。人は死ぬと知ったとき、立ちすくんで何も出来ないか、人間として最後の行動に出るかの二通りであり、宇野の場合は後者である。

芝居を本当に喜んでくれる人たちに会いたいという言葉了新藤兼人は直接宇野から聞いている。最後の撮影に行った時のことを、次のように記している。

重ちゃんに会ってがくぜんとした。目はおちくぼみ、腕は骨に皮がついているだけだった。取材を諦めようとしたというが、彼はかまわないカメラをまわしてくれ、話しておきたいことがあると言った。

彼は死を覚悟していたからまたの日といわないということがこちらにも伝わってきた。一時間ばかり仕事をし、「これから沖縄に行く。病院のベッドにいたってトラックの中で寝ていたって同じだ。外の景色を見ていると生き返った気持ちになる」と。新藤はその言葉を聞いてこれが宇野重吉の遺言状であり役者というものが羨ましく思った。生命が尽きるまで演じられたらさぞ仕合わせだろうな。

ある人は、彼の行動を人騒がせをしないで静かに寝ていたら、と批判したが、宇野はドラマの原点はリアリズムにあるという姿勢を死に際まで体で主張したかったのだ。新藤は 20 数年前にこの文章を書いたが、老骨にむちうって映画を撮り続けていた彼の姿に宇野重吉の生き方、死に方が重なっているように見える。人間は「いかに生きるか、いかに死ぬか」ではなく、「いかに死ぬために、いかに生きるか」が問われているのかもしれない。

次に樋口広太郎の死生観を紹介したい。彼は住友銀行からアサヒビールの社長に転じ、キリンを抜いて一時トップになり、アサヒの再生に大活躍したことで有名である。

私も一度会ったことがあるが、小柄で気さくで実に明るい人であった。彼は「企業のトップの明るい死生観」というエッセイを残している。

人間はどうせ死は避けられないものだからこそ充実した人生を送りたい。我が実業人の場合、世の中の動きをよくみて社会に対して有意義な仕事を成し遂げることが、最高の幸福であり、実業人の死に支度である。死に支度は人生に対する構えといった観念論ではなく、毎日毎日の生きる形にある。

人生には二つの生き方がある。一つは「とにかくこの世を楽しもう。未来は神まかせ、つまらんいいがかりは無視する」というゲーテの楽天的人生観。もう一つはカントの「苦しんだ行為のみ善。愛を保証するものは犠牲である」という厭世的人生観がある。樋口は明るい楽天的死生観を選択している。大切なのは、「死の問題とは生きる覚悟、生き様の問題である」と強く提言している。

そして彼の銀行時代の友人の死について、次のように書いている。その友人は新宿支店長で仕事もよく出来、人間関係も立派だったが、なによりも偉かったのは死ぬ 2 ヶ月前にはもうダメだと気がついて周囲に感謝し、みんなに「ありがとう」と言って死んでいった。こういう死に方が一番いい死に方であると思う、と。

以上のさまざまな死生観が、読者自身の死生観を考えると、何らかの参考になれば幸である。

[ 大学開放の講座でも、さまざまな「死生観」を極める講座があつていいと考える。編集追記 ]

---

### 渡邊 一雄 (わなたべ・かずお)

1936 年、岐阜県生まれ。一橋大学法学部卒。三菱電機(株)入社、三菱電機貿易香港(株)社長、マサチューセッツ工科大学スローンスクール修了。三菱セミコンダクターアメリカ社長、上智大学非常勤講師、川崎医療大学社会福祉学部教授、岩手県立大学教授・国際社会人教育センター長、日本社会事業大学大学院特別客員教授、世田谷区特別養護老人ホーム「等々力の家」常務理事・施設長を経て、現在日本社会事業大学理事、社会福祉法人奉優会理事、日本福祉囲碁協会会長、日本フィランソロピー研究所長、全日本大学開放推進機構副理事長。話し方の研究から落語の世界に興味をもち、弟子入りして「三遊亭大王」の名前をいただいて、落語家として高座に上がっている。